

「いっちょよさ」の福田さんは、親父さんが「市蔵」であったからの、屋号であろう。

私の家と同じく、子福者で男女が、そろそろであった。

「あんまや」の屋号もあった。今もある、蔵のところでお菓子の製造をしていたが、いつの間にか、止められた。

遠い記憶は、長男の「勲」さんが、満州に出征の際、熊に襲われたという事で、顔に大きな疵跡がある、堂々たる若人であった。

再度の出征で、戦死され、家の前に大きな墓を建てられた。

敗戦後、墓地に移されたが心残りのある、処置であったろう。

高塚博は、戦後町会議員になり、頑張っていたが若くして死んだ。

勇ましい愉快的な酒飲みであった。

吉岡さんの空き地は、いつも青草が生えていて、子供たちの持って来いの広場であった。

大きな板にボールを弾いた野球を、ひやーぼーる、と呼んだのは、語源を知りたい。

草地の西隣に、老夫婦が竹箒を編んで居られた。

長男は、東京の大学生だとか、で「かごや」と呼んだ。

朝日さんとの間には、吉岡さんからの清水が流れていて、「おしめ」や、野菜を洗う、川戸があった。

時には、灰袋の灰が、黒く沈殿していたりした。

どんな家でも主婦または、若い女性が織物工場で働くのが当然の時代で、工場の現金収入は、どんな家庭でも当てにしていた時代である、広場で遊んでいても、「晩ご飯やぞ」と呼びに来る順番が、先の家は「金持ち」だと言った時代である。

独りぼっちになっても、遊んでいなければならぬ子供は可哀そうだった。

東の方から、暗くなつていく、西川の「榛の木」が先に暮れる。

蝙蝠が、空を覆うほど乱舞すると、本当に寂びしかった、少年時代が、今は懐かしい。

高塚さんは、大家で村の役を歴代に涉つてされた。

私の記憶は、毎朝のように祖父を訪れる、親父さんは「小父、そしたらん」と、必ず呼ぶ事で、私は「おじ、そしたらんのが、きつちやった」と呼ぶことであった。

百寿会では、毎月二十日に「いきいきサロン」と銘打って、老人同士の勉強会を催す。

その際「福島の県道は、何故、あんなに曲がりくねっているのだろうか」を考えたことがある。

結論は「西川に沿って町並みが出来たから」である。

西川は、それほど大切であり、また禍を齎す川であった。